

保育者効力感に関する研究動向と課題

井上 祐子

要旨

本論文では、保育者効力感に関する国内の先行研究を整理し、今後の研究課題を明らかにすることを目的として、保育者効力感及び関連する先行研究を概観した。この結果、12編の先行研究を収集し、研究動向として「尺度開発・測定をした研究」「保育者効力感を従属変数とした研究」「保育者効力感を独立変数とした研究」に分類した。今後の研究課題として、①「保育者効力感に影響を及ぼす要因」、②「保育者効力感が変化する情報源」について知見を重ねる必要があると考えられる。

キーワード：文献研究、保育者効力感、保育者効力感尺度、自己効力感、社会的学習理論

1. 緒言

近年、都市化、核家族化、少子化等、子育てを取り巻く環境が多様化しており、2012年には保育所を利用する児童の数（利用児童数）が過去最高の増加数となっている。また、保育所定員数、保育所数、保育所利用児童割合も増加し続けている（厚生労働省2012）^{1) 2) 3)}。これらのことから、今後、保育者は利用者の多様な価値観を受け入れ、家族における養護・教育の代替機能として家庭を支える役割を求められる可能性があり、高い保育能力を身につける必要性が高まってくるといえる。この保育能力の向上について、「保育者効力感」という概念が多様化する保育環境において有効な保育を展開していく要因として指摘されている（田辺2011）。保育効力感とは「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義され、「教師効力感」の保育者版ともいわれている（三

木・桜井 1998)。教師効力感は Bandura, A. (1977) の自己効力感 (self-efficacy) の概念を応用したものである。自己効力感とは、Bandura (1977) が提唱した社会的学習理論の中核をなす概念のひとつであり、「ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分が上手くできるかどうかの予期」と定義されている。この自己効力感とは、①効力予期 (efficacy expectancy; ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという予期) と②結果予期 (outcome expectancy; ある行動がどのような結果を生み出すのかという予期) の 2 つに区分される。また、自己効力感が変化する情報源として、①実際に行動して、成功体験を持つ (遂行行動の達成)、②他人の行動を観察すること (代理的体験)、③自己強化や他者からの説得的な暗示 (言語的説得)、④生理的な反応の変化を体験してみること (情動的喚起) の 4 点が示されている (Bandura 1977)。この Bandura が提唱した社会的学習理論における自己効力感 (self-efficacy) を保育者に援用するならば、保育者は保育者効力感が変化する情報源を得ることによって、保育者効力感が形成され、保育能力の向上につながるものと予測される。

そこで、本研究では保育能力の向上への示唆を得ることねらいとして、日本における保育者効力感に関する国内の先行研究を整理し、今後の研究課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

収集の方法として、CiNii Articles を用いて、「保育者効力感」というキーワードから検索を行った。この結果、63 編の先行研究を収集した。次に、収集された先行研究 63 編から、保育者効力感に関する操作的定義への基礎的資料が得られるよう、尺度に関する先行研究 9 編を選択した。その後、尺度開発・測定、保育者効力感の関連要因に着目した先行研究 4 編 (西坂 2002; 西山 2006; 小藺江 2009; 小藺江 2013) を選択した。さらに、これらの先行研究において引用参考文献として記されていた関連文献 (三木・桜井 1998; 渡部・嶋崎 2004; 中村 2006; 浜崎・加藤・寺藺・荒木・岡本 2008; 朝木・鈴木

2009；前田・金丸・畑田 2009；田辺 2011；池田・大川 2012）も加えて、計 12 編の先行研究を検討した。12 編の先行研究は「内容」「結果」別に整理し、研究内容から分類を行った。なお、倫理的配慮として、「日本社会福祉学会 研究倫理指針 第2 指針内容 A 引用」に基づき、先行業績の検討に際しては、現著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示し、自説と他説との峻別を行った。

3. 結果

(1) 保育者効力感に関する先行研究の年度別動向

選択した 12 編の先行研究は、「尺度開発・測定をした研究」が 4 編（三木・桜井 1998；西山 2006；小藺江 2009；田辺 2011）、「保育者効力感を従属変数とした研究」が 6 編（渡部・嶋崎 2004；中村 2006；浜崎・加藤・寺藺・荒木・岡本 2008；朝木・鈴木 2009；池田・大川 2012；小藺江 2013）、「保育者効力感を独立変数とした研究」が 2 編（西坂 2002；前田・金丸・畑田 2009）の 3 つに分類された。この 3 つの分類をもとに、保育者効力感に関する研究動向について年度別に整理し（文末資料 1）、以下の結果が得られた。

- ① 1998 年に三木・桜井（1998）によって尺度開発・測定をした研究が始まりであり、保育者効力感に関する研究の歴史は浅いと言える。
- ② 2002 年以降、保育者効力感を独立変数とした研究（西坂 2002；前田・金丸・畑田 2009）が発表されているが、保育者効力感を従属変数とした研究の 3 分の 1 の文献数である。
- ③ 保育者効力感を従属変数とした研究は、尺度開発・測定をした研究及び保育者効力感を独立変数とした研究よりも文献数が多い。

(2) 尺度開発・測定をした先行研究について

尺度開発・測定をした先行研究について整理し（文末資料 2）、以下の結果が得られた。

三木・桜井（1998）は、保育の独自性を考慮して、教師効力感尺度をもとに

初めて保育者効力感尺度を開発した。保育者効力感尺度得点（採用した 10 項目の総得点）が、実習前では $\alpha = .83$ 、実習後では $\alpha = .85$ であり、いずれも内の一貫性が示されたことから、信頼性が確認された。妥当性については、幼稚園実習自己評価と保育者効力感尺度得点との間には、実習前においては有意な相関ではないが、実習後では、第 1 尺度 .33、第 2 尺度 .42、第 3 尺度 .54（どの尺度とも $p < .01$ ）の有意な相関があった。実習後に提出された幼稚園実習成績との相関では実習前の保育者効力感尺度得点とは .12 (n.s.) で無相関であったが、実習後のそれとは .18 ($p < .05$) と有意であった。幼稚園実習自己評価得点、幼稚園実習成績と実習後の保育者効力感尺度得点間に有意な相関が示されたことから妥当性が示された。

西山（2006）は、従来の保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）に「人間関係」に特化した 12 項目を加えて、多次元保育者効力感尺度の作成を行った。多次元保育者効力感尺度の総得点は、 $\alpha = .959$ と極めて高い値が得られた。また、現職保育者 25 名について約 1 か月の間隔をおいて、再検査法による信頼性係数を算出した結果、総得点は $\alpha = .921$ であり再検査信頼性係数は十分な値を示した。したがって、内的整合性の観点からも、安定性の観点からも、非常に高い信頼性を有することが確認された。多次元保育者効力感尺度は、12 項目「人間関係」尺度との相関では全体で .84 ($p < .01$)、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）との相関では全体で .81 ($p < .01$)、「困難性の認知」との相関では $-.37$ ($p < .01$)、「関心の強さ」との相関では .22 ($p < .01$)、「現在の保育実践」は .45 ($p < .01$) であり、多次元「人間関係」保育者効力感尺度の十分な構成概念的妥当性が確認された。

小藺江（2009）は、保育実習を通して学生の自己効力感がどのように変化するかを明らかにし実習の効果を検討するために、実習生の課題意識を細かく拾って保育実習生の自己効力感尺度を作成した。信頼性について、各因子の信頼性係数（ α 係数）が、第 1 因子 0.837、第 2 因子 0.809、第 3 因子 0.691、第 4 因子 0.733、第 5 因子 0.738、第 6 因子 0.716 であった。このことより内的一貫性が存在すると判断していた。また、保育実習自己効力感と保育者効力感の

間には、ピアソンの積率相関係数により、 $r = .801$ ($p < .01$) ときわめて強い相関関係が確認された。このことから、妥当性が示されたといえる。

田辺 (2011) は、心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為に対する保育者の信念や実現の見通しを「健康」保育者効力感と定義し、その測定を試みた。信頼性について、14 項目全体について信頼性係数 (α 係数) を算出したところ、 $\alpha = .959$ と極めて高い値が得られた。これにより、尺度全体として領域「健康」に関わる保育者効力感という一貫した概念を測定していることが示された。また、妥当性について、14 項目の合計得点と三木・桜井尺度の得点との Pearson の相関係数を算出したところ、 $r = .737$ ($p < .001$) と強い関連性が認められ、十分な妥当性が確認された。

(3) 既存尺度に関する統計学的な側面の検討

保育者効力感について、これまで、①保育場面全般に対する保育者効力感 (三木・桜井 1998、小藺江 2009)、②5 領域⁴⁾ に特化した保育者効力感 (西山 2006; 田辺 2011) に関する尺度開発・測定が試みられてきた。この既存尺度の統計学的な側面を検討した結果、確証的因子分析を使って検証された尺度は、多次元「人間関係」保育者効力感尺度 (西山 2006) だけであり、保育者効力感尺度 (三井・桜井 1998)、保育実習自己効力感尺度 (小藺江 2008)、「健康」保育者効力感尺度 (田辺 2011) は探索的因子分析を使って検証された尺度であった (文末資料 3)。

(4) 保育者効力感を従属変数とした先行研究について

保育者効力感を従属変数とした先行研究について整理し (文末資料 4)、以下の結果が得られた。

渡部・嶋崎 (2004) は、保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響について検討した。使用した尺度は、保育者効力感尺度 (三木・桜井 1998) であり、過去の遊び (遊びの種類・遊びの要素) を独立変数、心理社会的要因 (共感性・問題解決型行動特性・情緒的支援ネットワーク) を

媒介変数とし、それらを媒介として保育者効力感が高まることが明らかにした。これにより、過去の遊び経験は、心理社会的要因の発達に貢献しており、それらを媒介として保育者効力感が高まることが明らかになった。

中村（2006）は、保育学生の保育者効力感の発達について検討した。使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）であり、「入学直後の保育者になる強い期待感」が保育者効力感を高める要因とした。

浜崎・加藤・寺蘭・荒木・岡本（2008）は、保育者効力感の高低に影響を与える要因として、実習生個々人の実習に対する評価（行為的情報）に注目し保育者効力感に与える影響を共分散構造分析を用いて検討した。使用した尺度は、多次元保育者効力感尺度（西山 2006）であり、実習「前」の保育者効力感を独立変数、実習中の保育スキルを媒介変数とし、実習「後」の保育者効力感に影響を与えていることを示した。これにより、実習「前」の保育者効力感は、実習中の保育スキル（ノート整理や表現に関わる表現スキル・子どもへの指導やかかわり方の実践スキルから構成されている）や実習態度に影響を与えることが示された。また、実習中の保育スキルは実習「後」の保育者効力感に影響を与えていることが示された。

朝木・鈴木（2009）は、多次元保育者効力感尺度（西山 2006）を用いて、保育者効力感と子ども観の関連について検討した。使用した尺度は、多次元保育者効力感尺度（西山 2006）であり、「活発で純粋な存在」「大切な存在」「能力を秘め、可能性のある存在」という子ども観が「人と関わる基盤を作る」という保育者効力感を高め、「活発で純粋な存在」「能力を秘め、可能性のある存在」という子ども観が「関係性の広がりを支える」という保育者効力感を高めるとした。

池田・大川（2012）は、保育者のストレッサーが職務に対する精神状態に及ぼす影響について、仮説モデルを検討した。使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）であり、保育者のストレッサーを独立変数、保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数とし、勤務に対する精神状態（バーンアウト傾向・保育者効力感の高まり）に及ぼす影響を検討した。

小藺江（2013）は、「実習の事前準備」「環境や教材の工夫」など保育のスキルに近い因子において「机上の学習の進行に伴って学生の自己効力感は下がり、実際にスキルを身に着けることにより自己効力感は高くなる」という仮説を検討した。使用した尺度は、保育実習自己効力感尺度（小藺江 2009）であり、「実習の事前準備」「環境や教材の工夫」など保育スキルを使う用意をして実習に臨むことが実習後の自己効力感を上昇させることを明らかにした。

なお、上記に挙げた既存尺度のうち、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）は 3 件の先行研究（渡部・嶋崎 2004；中村 2006；池田・大川 2012）、多次元「人間関係」保育者効力感尺度（西山 2006）は 2 件の先行研究（浜崎・加藤・寺藺・荒木・岡本 2008；朝木・鈴木 2009）、保育実習自己効力感尺度（小藺江 2009）は 1 件の先行研究（小藺江 2013）で使用された。

(5) 保育者効力感を独立変数とした先行研究について

保育者効力感を独立変数とした先行研究について整理し（文末資料 5）、以下の結果が得られた。

西坂（2002）は、現職の幼稚園教諭を対象に、幼稚園教諭のストレス評価に保育者効力感が与える影響について検討した。使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）であり、幼稚園教諭のストレスを従属変数とし、保育者効力感が「子ども理解・対応の難しさ」「学級経営の難しさ」というストレス評価の低さに関わっていることを示した。

前田・金丸・畑田（2009）は、西坂（2002）の想定した因果モデル「個人特性→ストレス評価→精神的健康」を参考に、個人特性としての保育者効力感、社会的スキルが保育者の職務満足感及び精神的健康に影響を及ぼす過程を分析・検討した。使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）であり、保育者効力感が職務内容の満足感を媒介して精神的健康に間接的に影響を及ぼしていることを示した。

なお、保育者効力感を独立変数とした先行研究（西坂 2002；前田・金丸・畑田 2009）では、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）を用いており、多次

元「人間関係」保育者効力感尺度（西山 2006）、保育実習自己効力感尺度（小藺江 2009）を用いた先行研究はなかった。

4. 考察

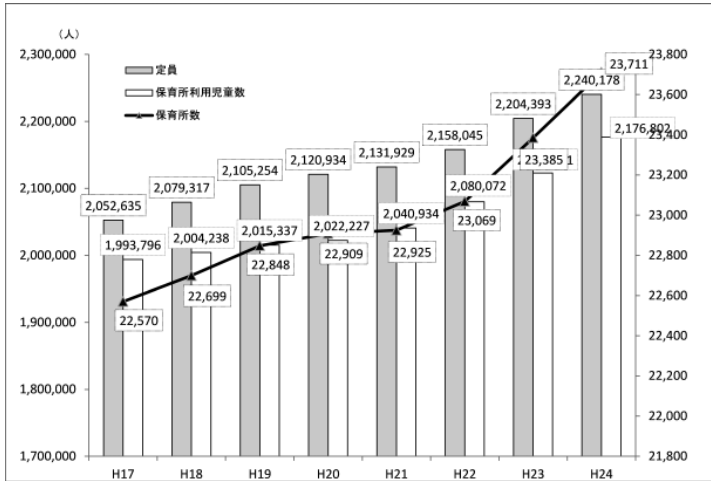
保育者効力感に関する研究動向を整理した結果、今後の研究課題として以下の4点がいえよう。

- ①日本における保育者効力感に関する研究は、三木・桜井（1998）による尺度開発・測定の研究が始まりであり、保育者効力感に関する研究の蓄積が喫緊の課題であるといえる。
- ②保育者効力感に関する研究動向では、保育者効力感を従属変数とした研究が多かった。これは、「保育者効力感」に影響を及ぼす要因を明らかにすることにより、保育士の保育能力の向上に活かすねらいがあるといえる。保育士養成教育や現任研修へ還元する上で、保育者効力感を従属変数とした研究の蓄積もまた喫緊の課題であるといえる。
- ③先行研究で作成された尺度に関する統計学的な側面の検討の結果、確証的因子分析を使って検証された尺度が、多次元「人間関係」保育者効力感尺度（西山 2006）だけであり、保育場面全般に対する保育者効力感について、知見を重ねる必要がある。
- ④西山（2006）が開発した尺度は「人間関係」に特化しており、この尺度を使用した先行研究（浜崎・加藤・寺藺・荒木・岡本 2008；朝木・鈴木 2009）によって、子ども観や実習中の保育スキルが人間関係に関する保育者効力感に影響を及ぼすことが明らかになった。今後、子ども観や実習中の保育スキル以外にどのような「保育者効力感に変化する情報源」が人間関係に関する保育者効力感に影響を及ぼすのか、知見を重ねる必要がある。

注

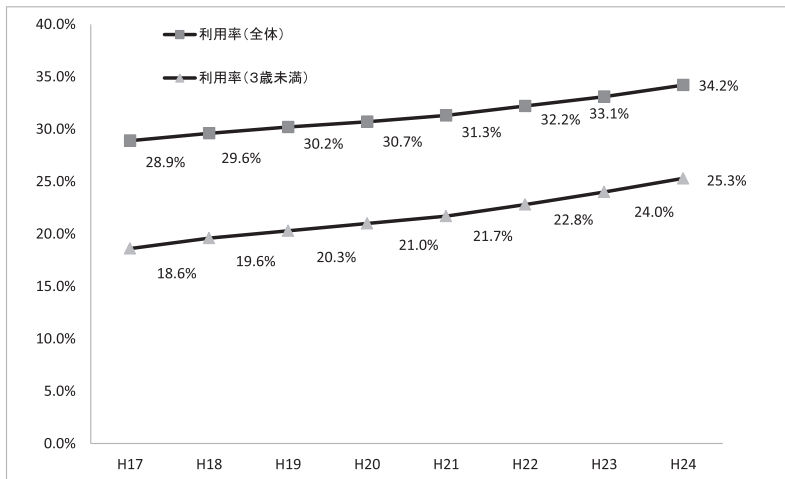
- 1) 2012年には、保育所定員数は224,178人で前年から35,785人（1.6%）の増、利用児童数は217,6802人で前年から53,851人（2.5%）の増、保育所数は

23,711 か所あり前年から 326 か所（1.4%）の増であった。保育所定員数、利用児童数及び保育所数の推移は以下のとおりである（厚生労働省 2012）。



資料出所：厚生労働省「保育所関連状況取りまとめ（平成 24 年 4 月 1 日）」（2012 年）より抜粋

2）保育所利用率の推移は以下のとおりである（厚生労働省 2012）。



資料出所：厚生労働省「保育所関連状況取りまとめ（平成 24 年 4 月 1 日）」（2012 年）より抜粋

- 3) 2012 年には、就学前児童の保育所利用児童割合（保育所利用児童数÷就学前児童数）は 34.2%で、前年（33.1%）から 1.1 ポイントの増加しており、うち 3 歳未満児は 25.3%で、前年（24.0%）から 1.3 ポイントの増加していた（厚生労働省 2012）。
- 4) 「領域」とは小学校などの「教科」とは異なった概念であり、幼児期に育てたい内容を発達の 5 つの側面（①心身の健康に関する領域「健康」、②人との関わりに関する領域「人間関係」、③身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、④言葉の獲得に関する領域「言葉」、⑤完成と表現に関する領域「表現」）からまとめたものである（大豆生田 2001）。

文献

- 厚生労働省（2012）「保育所関連状況取りまとめ（平成 24 年 4 月 1 日）」
（<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002khid.html>, 2013.7.20）
- 大豆生田啓友（2001）「第 1 章 保育内容とは何か」森上史朗・渡辺英則・大豆生田啓友編『新・保育講座 保育内容総論』ミネルヴァ書房, 4-29.
- Bandura,A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84 : 191-215.
- 三木知子・桜井茂男（1998）「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』46（2）, 203-211.
- 西山修（2006）「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』44（2）, 246-256.
- 小藺江幸子（2009）「保育実習自己効力感尺度作成の試み」『淑徳短期大学研究紀要』48, 123-135.
- 田辺昌吾（2011）「心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について－「健康」保育者効力感からの検討－」『四天王寺大学紀要』51, 175-185.
- 渡部努・嶋崎博嗣（2006）「保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響」『日本保育学会大会発表論文集』57, 192-193.
- 中村多見（2006）「保育学生の保育観（1）－保育者効力感の発達－」『高松大

学紀要』45, 197-206.

浜崎隆司・加藤孝士・寺菌さおり・荒木美代子・岡本かおり（2008）「保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響－実習評価を媒介した因果モデルの検討－」『鳴門教育大学研究紀要』23, 121-127.

朝木徹・鈴木由美（2009）「子どもの人間関係を育む保育実践の要因－保育者効力感と子ども観の関連について－」『児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要』11, 109-119.

池田幸代・大川一郎（2006）「保育士・幼稚園教諭のストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響：保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として」『発達心理学研究』23（1）, 23-35.

小藺江幸子（2013）「保育実習が学生の自己効力感に与える影響：保育専攻学生2年間の縦断的データの分析」『淑徳短期大学研究紀要』52, 117-128.

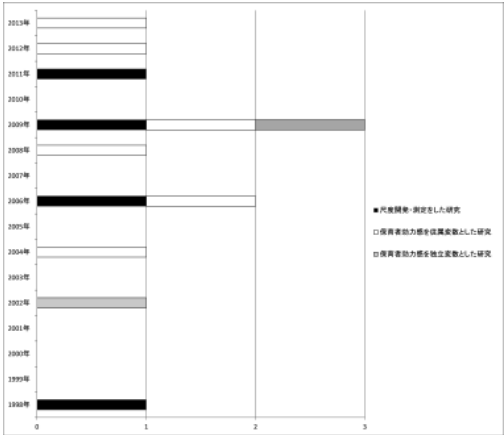
西坂小百合（2002）「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響」『教育心理学研究』50（3）, 283-290.

前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎（2009）「保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響」『九州保健福祉大学研究紀要』10, 17-23.

文末資料

文末資料 1 保育者効力感に関する先行研究の年度別動向

選択した 12 編の先行研究について、「内容」「結果」別に整理し、研究内容から分類を行った表を以下に記す。



文末資料 2 尺度開発・測定をした先行研究一覧

尺度開発・測定をした先行研究について整理した表を以下に記す。

番号	筆者	内 容	結 果
1	三木・桜井 (1998)	保育の独自性を考慮して、教師効力感尺度をもとに初めて保育者効力感尺度を開発した。	保育者効力感尺度得点（採用した 10 項目の総得点）が、実習前では $a = .83$ 、実習後では $a = .85$ であり、いずれも内の一貫性が示されたことから、信頼性が確認された。妥当性については、幼稚園実習自己評価と保育者効力感尺度得点との間には、実習前においては有意な相関ではないが、実習後では第 1 尺度 .33、第 2 尺度 .42、第 3 尺度 .54（どの尺度とも $p < .01$ ）の有意な相関があった。実習後に提出された幼稚園実習成績との相関では実習前の保育者効力感尺度得点とは .12 (n.s) で無相関であったが、実習後のそれとは .18 ($p < .05$) と有意であった。幼稚園実習自己評価得点、幼稚園実習成績と実習後の保育者効力感尺度得点間に有意な相関が示されたことから妥当性が示された。

番号	筆者	内 容	結 果
2	西山 (2006)	従来の保育者効力感尺度 (三木・桜井 1998) に「人間関係」に特化した 12 項目を加えて、多次元保育者効力感尺度の作成を行った。	<p>多次元保育者効力感尺度の総得点は、$\alpha = .959$ と極めて高い値が得られた。また、現職保育者 25 名について約 1 か月の間隔をおいて、再検査法による信頼性係数を算出した結果、総得点は $\alpha = .921$ であり再検査信頼性係数は十分な値を示した。したがって、内的整合性の観点からも、安定性の観点からも、非常に高い信頼性を有することが確認された。</p> <p>多次元保育者効力感尺度は、12 項目「人間関係」尺度との相関では全体で .84 ($p < .01$)、保育者効力感尺度 (三木・桜井 1998) との相関では全体で .81 ($p < .01$)、「困難性の認知」との相関では $-.37$ ($p < .01$)、「関心の強さ」との相関では .22 ($p < .01$)、「現在の保育実践」は .45 ($p < .01$) であり、多次元「人間関係」保育者効力感尺度の十分な構成概念的妥当性が確認された。</p>
3	小蘭江 (2009)	保育実習を通して学生の自己効力感がどのように変化するかを明らかにし実習の効果を検討するために、実習生の課題意識を細かく拾って保育実習生の自己効力感尺度を作成した。	<p>信頼性について、各因子の信頼性係数 (α 係数) が、第 1 因子 0.837、第 2 因子 0.809、第 3 因子 0.691、第 4 因子 0.733、第 5 因子 0.738、第 6 因子 0.716 であった。</p> <p>このことより内的一貫性が存在すると判断していた。また、保育実習自己効力感と保育者効力感の間には、ピアソンの積率相関係数により、$r = .801$ ($p < .01$) と極めて強い相関関係が確認された。このことから、妥当性が示されたといえる。</p>
4	田辺 (2011)	心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為に対する保育者の信念や実現の見通しを「健康」保育者効力感と定義し、その測定を試みた。	<p>信頼性について、14 項目全体について信頼性係数 (α 係数) を算出したところ、$\alpha = .959$ と極めて高い値が得られた。これにより、尺度全体として領域「健康」に関わる保育者効力感という一貫した概念を測定していることが示された。また、妥当性について、14 項目の合計得点と三木・桜井尺度の得点との Pearson の相関係数を算出したところ、$r = .737$ ($p < .001$) と強い関連性が認められ、十分な妥当性が確認された。</p>

文末資料 3 研究方法、測定尺度の検討方法を軸にして分類した先行研究一覧

尺度開発・測定をした先行研究について、研究方法、測定尺度の検討方法を軸にして分類した表を以下に記す。

番号	分 類	測定尺度の 検討方法	探索的因子分析	確証的因子分析
		尺度・作者名		
1	保育場面全般	保育者効力感尺度 (三木・桜井 1998)	○	
2		保育実習自己効力感尺度 (小蘭江 2008)	○	
3	「5 領域」に 特化	多次元「人間関係」 保育者効力感尺度 (西山 2006)		○
4		「健康」保育者効力感尺度 (田辺 2011)	○	

文末資料 4 保育者効力感を従属変数とした先行研究一覧

保育者効力感を従属変数とした先行研究について整理した表を以下に記す。

番号	筆者	内 容	結 果	備 考
1	渡部・嶋崎 (2004)	保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響について検討した。	過去の遊び経験は、心理社会的要因の発達に貢献しており、それらを媒介として保育者効力感が高まることが明らかになった。	使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）
2	中村（2006）	保育学生の保育者効力感の発達について検討した。	「入学直後の保育者になる強い期待感」は、保護者効力感を高める要因であった。	使用した尺度は保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）

番号	筆者	内 容	結 果	備 考
3	浜崎・加藤・ 寺蘭・荒木・ 岡本 (2008)	保育者効力感の高低に 影響を与える要因とし て、実習生個々人の実 習に対する評価（行為 的情報）に注目し保育 者効力感に与える影響 を共分散構造分析を用 いて検討した。	実習「前」の保育者効 力感、実習中の保育 スキル（ノート整理や 表現に関わる表現スキ ル・子どもへの指導や かわり方の実践スキ ルから構成されている） や実習態度に影響を与 えることが示された。 また、実習中の保育ス キルは実習「後」の保 育者効力感に影響を与 えていることが示され た。	使用した尺度は、 多次元保育者効 力感尺度（西山 2006）
4	朝木・鈴木 (2009)	多次元保育者効力感尺 度(西山 2006)を用いて、 保育者効力感と子ども 観の関連について検討 した。	「人と関わる基盤を作 る」「関係性の広がり を支える」という保育 者効力感が高い保育者 は、子ども達の関わり を広げ、能力を認め、 可能性を伸ばす保育を 実践していた（保育者 効力感は独立変数）。	使用した尺度は、 多次元保育者効 力感尺度（西山 2006）
5	池田・大川 (2012)	保育者のストレッサー が職務に対する精神状 態に及ぼす影響につい て、仮説モデルを検討 した。	保育者の認識のうち保 育者効力感を規定する ポジティブな効果が見 られた媒介変数は、「専 門職としての誇り」「保 護者・子どもとの信頼 関係」であった。	使用した尺度は、 保育者効力感尺 度（三木・桜井 1998）
6	小蘭江 (2013)	「実習の事前準備」「環 境や教材の工夫」など 保育のスキルに近い因 子において「机上の学 習の進行に伴って学生 の自己効力感は下がり、 実際にスキルを身に着 けることにより自己効 力感が高くなる」とい う仮説を検討した。	机上の学習を進めるこ とは必ずしも自己効力 感が低くなることと直 接の関係はなく、むし ろ、意図的に保育スキ ルを使うための用意を して実習に臨むことが 実習後の自己効力感を 上昇させることが明ら かになった。	使用した尺度は、 保育実習自己効力 感尺度（小蘭江 2009）

文末資料 5 保育者効力感を独立変数とした先行研究一覧

保育者効力感を独立変数とした先行研究について整理した表を以下に記す。

番号	筆者	内容	結果	備考
1	西坂 (2002)	現職の幼稚園教諭を対象に、幼稚園教諭のストレス評価に保育者効力感が与える影響について検討した（幼稚園教諭のストレスと保育者効力感の関連性）。	保育者効力感は、「子ども理解・対応の難しさ」「学級経営の難しさ」というストレス評価の低さに関わっていた（保育者効力感は独立変数）。	使用した尺度は、保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）
2	前田・金丸・畑田 (2009)	西坂 (2002) の想定した因果モデル「個人特性→ストレス評価→精神的健康」を参考に、個人特性としての保育者効力感、社会的スキルが保育者の職場満足感及び精神的健康に影響を及ぼす過程を分析・検討した。	保育者効力感、社会的スキル、職務内容の満足感、精神的健康の因果モデルに関して、保育者効力感は職務内容の満足感を媒介して精神的健康に間接的に影響を及ぼしていた。	使用した尺度は保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）

Trends and issues of studies on pre-school-teacher-efficacy

Yuko INOUE

Purpose

This study is intended to grasp trends and issues of studies on pre-school-teacher-efficacy.

Method: Method of this study is literature study on pre-school-teacher-efficacy.

Result : Trends of studies on pre-school-teacher-efficacy were “Study of developing a measure scale”, “The study that pre-school-teacher-efficacy is a dependent variable”, and “The study that pre-school-teacher-efficacy is an independent variable”.

Conclusion : The future research theme is to study “a factor to have an influence on pre-school-teacher-efficacy”, “a source of information where pre-school- teacher-efficacy changes”.

Key words

literature study, pre-school-teacher-efficacy, a scale for pre-school-teacher-efficacy, self-efficacy, social learning theory of Bandura